

長尺

古尺

云ふは誤なり、前に云ふ如く、日本曲尺にて漢の尺をはかれば、八寸八分餘に當る也、しかしなが  
ら證據なければ、必ず武王の尺也とも定め難し、未考、

〔多聞院日記〕天文十二年四月廿九日、ヘンサン長尺に五丈ヲ、三百七十五文ニ買テ、ハリトノヘ遣  
之、絹尺に五丈七尺、五寸ありしが、一尺六寸ナラデハ不餘、

〔古今要覽<sup>器財</sup>〕多聞院日記に、長尺といふものあり、日記に就て之を按ずるに、曲尺の一尺一寸  
五分にあたるものにして、即今南都にてひさぐ甲冑用鷹尺といふもの、類にやあらん、

〔本朝度量權衡考<sup>度</sup>〕古尺ノ今世ニ殘リ傳ハル者ヲ求ムルニ、大和國法隆寺ニ象牙尺アリ、聖德太  
子ノ遺物ナリト云傳フ、吾友松崎慊堂、復コレヲ唐ノ鏤牙尺ナラント云ベリ、コノ說據リ信ズベ  
シ、然ラバ聖德太子ノ遺物ニハアラデ、遣唐使歸化人ナドノ將來セシモノ、寺家ニ入リシガ傳

ハレルナラン、長サ今ノ曲尺ノ九寸八分弱ナリ、陸奥國耶麻郡大寺村ノ慧日寺ニ、瑠璃尺ト云ヘ  
法隆寺ノ尺ト同シ、タラ法隆寺ノ尺ハ紅ニ綵リタルナ、是ハ青ク綵リタル尺ニ比レバ、四釐許長シ、其質ハ  
牙尺ナレドモ、青キニヨリテ瑠璃尺トハ云フナリ、其長サ法隆寺ノ尺ニ比レバ、四釐許長シ、是モ

唐ノ鏤牙尺、即唐ノ大尺ナルベケレドモ、儀物ニシテ用尺ニアラザレバ、據トナシ難シ、○中又古  
ナルベシ、律尺トテ藏スルアリ、律トハ、釋家ノ律ニハ非ズ、予望之、其摹ヲ得シハ、叡山尺、曲尺七寸

ニ山門僧惠定、於高野尺、曲尺七寸九分、舊久竝寫、永九年、於東寺金蓮院尺、曲尺八寸一分、強背ニ  
寶乘院寫トアリ、高野尺、高野山、酬恩庵、僧久竝寫、永九年、於東寺金蓮院尺、曲尺八寸一分、強背ニ  
尾尺、曲尺八寸二分、弱背、泉涌寺尺、曲尺八寸二分、後傍國師、將來ノ物ト云傳フ、按ズルニ、泉涌寺尺

寸ナリ、建仁寺ノ相傳ハ八寸二分ニ餘タル、當時ノ相承ハ八寸二分ナリトアリ、此筆記ハ、文龜永  
正ノ間ノモノナリ、今彼寺ノ尺ヲ摹シタル計レバ、八寸二分ナリトアリ、此筆記ハ、文龜永  
正ノ間ノモノナリ、今彼寺ノ尺ヲ摹シタル計レバ、八寸二分ナリトアリ、此筆記ハ、文龜永

原、其校セシ長サ、半分ノ異アルハ、其頃既ニ訛長ノ曲尺アリテ計リシニハ、アラザルベシ、大安寺尺、  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南

〔聖德太子傳私記〕周世尺、  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南

〔聖德太子傳私記〕周世尺、  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南

〔聖德太子傳私記〕周世尺、  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南  
於西大寺、二分半、背ニ康永二年、九月十四日、什物之内也トアリ、法壽庵尺、曲尺八寸三分、背ニ南